

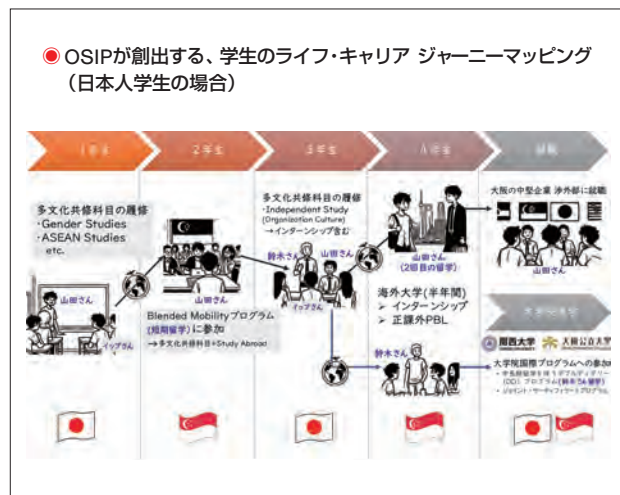
◎ 文部科学省「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」に採択

社会変革担うグローバル「人財」育成へ OSIP
Osaka Social Impact Project

関西大学は大阪公立大学と連携して、文部科学省「大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業」に申請し、「大阪・チェンジメーカーズ：課題主導の社会的インパクト共創教育プロジェクト (OSIP)」が11月15日付で採択された。この事業は国際的な共創体制構築などを通じて、留学生の派遣、受け入れ・定着の好循環を創出し、大学の国際化を促進するのが目的で、期間は2029年度までの6年間。

このプロジェクトでは、地域企業との強いネットワークを持つ関西大学と、国際都市大阪のシンクタンク機能を担う大阪公立大学がタッグを組み、それぞれの強みを生かしながら、大阪を拠点に未来の社会を変革するリーダー(チェンジメーカーズ)の育成を目指す。異なる文化などを越えて学べる多文化共創プログラムなどを通じ、次世代の社会課題を自分ごととしてとらえ、理解を深めながら解を模索する「インシュードリブン」の意識とスキルを兼ね備えた「人財」の輩出を目指す。

具体的には、異なる言語、文化、価値観を持つ日本人学生と外国人留学生在が、実際の社会課題を主体的に取り扱った学習、つまり多文化共創の機会を大幅に増やし、多様な領域で柔軟に活動できるようにさまざまな能力を涵養する。また海外連携大学から「人財」のタマゴの優秀な外国人留学生在を積極的に受け入れ、大阪・関西でのキャリア形成を支援する。大阪・関西万博開催を控え、インバウンドも急増する大阪の特性を生かし、地域からグローバルな視野で社会課題に取り組む人財育成を目指す。



財層のタマゴ」の優秀な外国人留学生在を積極的に受け入れ、大阪・関西でのキャリア形成を支援する。大阪・関西万博開催を控え、インバウンドも急増する大阪の特性を生かし、地域からグローバルな視野で社会課題に取り組む人財育成を目指す。

◎ 「関大防災Day2024 ～広がれ！みんなの安全・安心！～」を開催

近隣地域も協力！ 毎年1万人が参加する関大独自の防災啓発訓練



11月15日、学生・教職員・近隣住民ら約1万人が参加する防災啓発イベント「関大防災Day2024～広がれ！みんなの安全・安心！～」が千里山・高槻・高槻ミュージズ・堺・吹田みらい・北陽・梅田の各キャンパス及び東京センターで行われた。

15回目の開催となる今年は、マグニチュード7.6(震度6強以上)の巨大地震が発生したと想定し、学生・教職員の避難から誘導、安否確認に至るまでの訓練を実施した。

さらに、千里山キャンパスでは、エレベーターが使えない状況で歩行困難者の階段避難をサポートする非常用階段避難車体験をはじめ、消火器・消火栓体験や、避難器具体験、大学・地域協同による備蓄の非常食を用いた炊き出し訓練など、民間企業や地元自治体、近隣住民と連携しながら、さまざまな啓発イベントが行われた。

また、吹田市危機管理室による特別講演会を千里山キャンパスにて上映。災害時における避難の心得や各避難地の機能といった、危機管理への理解や防災力の向上を図る内容に、参加者は熱心に耳を傾けていた。



JOINT PROGRAM ■社会貢献・連携事業/地域連携

◎ 関西大学にパタゴニアの「Worn Wear College Tour」が来訪

衣類を修理し、環境意識を向上
循環型社会について考えるきっかけを作る



関西大学は、衣類を修理し長く使うことで地球資源を守る価値を発信するパタゴニア日本支社主催の「Worn Wear College Tour」と連携し、10月17日、千里山キャンパスでイベントを開催した。「Worn Wear」は、「壊れたら、修理しよう！」を合言葉に、「つぎはぎ」と名付けられたリベアトラックで全国の大学や専門学校を巡り、衣類の修理や修理体験の機会を学生に提供しながら、未来に向けて「責任ある消費とは何か」を共に考え、モノを使い続ける喜びを届けている。

2024年5月に開催された商学部の深澤光樹准教授ゼミによるSDGsアクションイベントなどにおいて、パタゴニアと協働して

産学連携プロジェクトに取り組んできた経緯もあり、今回のイベントが実現した。

当日は、リベアトラックの「つぎはぎ」が訪れ、傷んだ衣類の裁縫修理をする「リベアサービス」や衣類の修理体験ができる「セルフリベア」、着なくなったTシャツをマイバッグに作り変える「アップサイクルワークショップ」のブースを展開。一方、深澤ゼミは「古着交換会」や2024年の夏に行ったカンボジアフィールドワークの写真展示、自分たちが開発したフェアトレード商品の販売を行ったほか、同学部の木村麻子教授ゼミによる研究展示も実施。ゼミ生たちは、訪れた人々に日頃の研究成果やゼミでの取り組みを熱心に紹介した。



◎ 第44回『地方の時代』映像祭2024～小さな民が歴史をつくる～を開催

地域・地方からわが国のあり方を問う



11月9日～15日、「第44回『地方の時代』映像祭2024小さな民が歴史をつくる」が千里山キャンパスにて開催された。

1980年に始まった本映像祭は、「地域・地方からわが国のあり方を問う」を基本テーマに、優れたドキュメンタリーや映像作品を顕彰するもの。初日には贈賞式が行われ、名古屋テレビ放送が制作した「メーテレドキュメント 掌で空は隠せない～1926木本事件～」がグランプリを受賞した。本学からは「市民・学生・自治体部門」で、社会学部の齊藤潤一教授ゼミの『家族のかたち～母と僕と、初めての父～』と『弱みが強みの』の2作品が奨励賞に選ばれた。その後、フォトジャーナリストの石川文洋氏による記念講演『86歳、元・戦場カメラマンが見つめ続けるふるさと沖繩』をはじめ、グランプリ作品の上映会、シンポジウム『阪神・淡路大震災30年いちのちを守る災害報道～地域に根ざしたメディアの挑戦～』が行われた。



また、翌10日にはワークショップ『大学生・高校生の映像制作～私たちの映像表現を探して～』『石丸現象にヒントあり!! 地域メディアの生きる道』が実施され、13日には特別上映会なども行われたほか、会期を通して、グランプリ受賞作品をはじめ、入選した38作品及び一次審査以上を通過した120作品が上映された。

さらに、30日には関西大学東京センターにて「グランプリ受賞作品を語る会」も開催され、制作者や関係者が上映された作品に関して熱く語り合った。